

<sup>1</sup> アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。<sup>2</sup> アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。<sup>3</sup> ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。<sup>4</sup> そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。<sup>5</sup> アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。<sup>6</sup> その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。<sup>7</sup> アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。<sup>8</sup> アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間でももちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。<sup>9</sup> あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」<sup>10</sup> ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。<sup>11</sup> ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。<sup>12</sup> アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。<sup>13</sup> ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。<sup>14</sup> 主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。<sup>15</sup> 見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。<sup>16</sup> あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。<sup>17</sup> さあ、この土地を縦横に歩き回るのがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」<sup>18</sup> アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの榿の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

#### 創世記 13 章 1～18 節

<sup>1</sup> ああ、物分りの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。<sup>2</sup> あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。<sup>3</sup> あなたがたは、それほど物分りが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。<sup>4</sup> あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。無駄であったはずはないでしょうに……。<sup>5</sup> あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか。<sup>6</sup> それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです。<sup>7</sup> だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。<sup>8</sup> 聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。<sup>9</sup> それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。<sup>10</sup> 律法の実行に頼る者はだれでも、呪われています。「律法の書に書かれているすべての事を絶えず守らない者は皆、呪われている」と書いてあるからです。<sup>11</sup> 律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。<sup>12</sup> 律法は、信仰をよりどころとしていません。「律法の定めを果たす者は、その定めによって生きる」のです。<sup>13</sup> キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです。<sup>14</sup> それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、わたしたちが、約束された“霊”を信仰によって受けるためでした。

ガラテヤの信徒への手紙3章1～14節

## 1. たしかに変化した1年

11月の第一日曜日は、教会暦で「聖徒の日」として憶える主日です。わたしたちの教会は、礼拝堂前方の横に写真を飾り、先に召された方々を記念して召天者記念礼拝をおささげしています。教会が「諸聖人の日」としてこの日を憶える伝統は、9世紀には完全に定着しました。この起源はさらに古く、1世紀末頃にさかのぼると言われています。1世紀末頃、生まれたてのキリスト教会は非常に厳しい迫害の時代に入りました。激しい迫害の中で福音宣教のために命をささげた人々のゆえに、教会は前進しました。教会はいつの時代も先人たちの歩みを忘れませんでした。「聖徒の日」は、教会暦の中でもっとも古い、教派を超えた祝祭のひとつです。

わたしたちは毎年この礼拝を守る中でさまざまな思いを抱きます。昨年の召天者記念礼拝を思い出します。今年、わたしたちは3名の教会員と関係者3名を天に送りました。1年前に、この礼拝堂で言葉を交わしていた方が、わたしたちの間から取り去られたということは、大きな衝撃であり、悲しみです。ご自宅で待っているからと礼拝から急いで帰っていたのに、もうそのお家にご母堂がいらっしやらないということ。礼拝終わりに、ご息女と一緒にランチの約束があるからと足取り軽く帰られた姉妹も、ここにいらっしやらないということ。わたしたちには理解しがたいことです。わたしたちの日常生活の秩序だった列の中に、突如

として何かが突っ込んでくることがあります。そして、ものすごい音を立てて、大切なものを奪い去って行くことがあります。わたしたちは、何でもなかった日常の中で、別れを経験することになります。大人であれば、別れがあることくらいは知っています。しかし、どのような別れを迎えるのかを、最初から知っている人はいません。

今日、ご一緒に聞いている聖書は、別れの物語です。「ここで別れよう」(9節)と、アブラハムは切り出します(アブラムは後に「アブラハム」に改名されます)。何のために、この家族は別れなければならないのでしょうか。財産を保つためにです。アブラハムは「非常に多くの家畜や金銀を持って」(2節)いました。アブラハムの甥のロトもまた、「羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持って」(5節)いました。この財産の大きさが不和の発端となります。アブラハムの家畜の牧者たちと、ロトの家畜の牧者たちの間で争いが起こり始めました。財産の家畜を守るためには、互いに広い土地、水と牧草を必要とします。一家の分裂の溝は、これ以上一緒に暮らせないほど深くなっていました。アブラハムは、ロトとの争いに決着をつけるために、それぞれに別々の道に行くことを提案します。そしてロトには、先に土地を選ぶようにと言います。「あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行く」(9節)。

## 2. 人生の一部との別れ

寂しい気がします。別れる以外によい方法はなかったのか、と思います。ロトもロトで、伯父家族と一緒に行く道よりも、新しい土地を、すなわち別れを選びます。ロトは遠慮なくヨルダンの水の豊富な平地の方を選び取ります。その地域は、ガリラヤ湖から死海に至るまでの平地で、まるで「**主の園のように**」(10 節) 見渡すかぎりよく潤っていたと言います。しかし「**主の園**」が、最初の人間の墮罪の舞台となったように、その場所には影があります。その地は「**エジプトのよう**」(10 節)でもあったと言います。後に神の民が奴隷として苦しめられる「**エジプト**」は、肥沃な地が、嘆きの地となることを暗示しています。ロトが選び取った地には、後に「**邪悪**」(13 節)の象徴ともなる「**ソドムとゴモラ**」の町が含まれています。悪びれもせず肥沃な地を選び取った甥のロトの選択を、アブラハムは受け入れます。

遊牧生活の人々にとって、どのような土地を拠点とするかは繁栄と滅びを分ける重要な選択です。しかし、ロトが左右のどちらを選んだかということは、アブラハムにとっては、さほど重要ではありませんでした。「**こうして彼らは、左右に別れた**」(11 節)のです。きっぱりと。そうです。彼らは別れない方法ではなく、別れる道を選んだのです。この別れの物語が、わたしたちの別れの物語と何の関わりがあるのかと思われるかもしれません。わたしたちが経験する別れの多くは、強いられた

別れです。自ら進んで別れるということではなく、抗いがたい力によって、別れが向こうからやって来きます。この別れには悲しみ、痛みが伴います。しかし、耐え難いほどの痛みにかかわらず、別れなければならないのです。事実、わたしたちはこの地上を生きていく中で、何千何万という別れを経験していきます。その数は問題ではありません。決定的な別れというものがありません。

わたしたちの中で何かが変わるとき、そこには別れがあります。進学でクラスが変わるとき、馴れ親しんだ故郷を離れるとき、別れがあります。就職をするとき、職場が変わるとき、別れがあります。結婚さえもひとつの別れです。どんなに誇りをもって仕事をしていても、ひとつの職場に勤め続けることには限界があります。仕事を去る時が来ます。運転免許も返さなければならぬ時が来ます。病気や加齢で身体が不自由になっていけば、それまでの自由に別れを告げなければなりません。そして別れることなど考えもしなかった人が、目の前から取り去られる日が来ます。別れは、あつてはならないアクシデントではなく、必然の出来事です。別れには痛みや不安が伴います。これもわたしたちの通る道です。しかしながら、わたしたちは別れの前に、受け身であるばかりではありません。人生の一部であった部分に、自分から別れを告げなければならぬときがあります。アブラハムが言ったように、「**ここで別れよう**」と言わなければならないときがあります。

## 3. さあ、目を上げて

わたしたちの間で、悪い経験だけをしてきた人もいなければ、良い経験だけをしてきたという人もありません。それらすべての経験を背に、これまで通ってきた道ではなく、新しい道を行かなければなりません。わたしたちにとって、過去ではなく今を生きることは、この場所から出立することです。神は、壮大なご計画をもって、わたしたちを呼ばれます。

神は、世界の多様な民族の中から、アブラハムというひとりの人をお選びになりました。「**あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める 祝福の源となるように。...地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る**」(創 12:1~3)。アブラハムは、主の言葉を聞き、これに従って旅立ちました。このとき、アブラハムは 75 歳で、父テラも健在でした。離れられない故郷に、離れるわけにはいかないはずの父の家に、アブラハムは別れを告げて出立しました。75 歳。この別れが、すべての信仰の始まりとなりました。アブラハムの別れは一度きりのことではなく、むしろその旅路はそれまでの習慣や執着からの別れの連続でした。

神は、愛する甥と別れて新しく歩み出そうとするアブラハムに、再び現れて言われます。「**さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をす**

べて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える」(14~15 節)。アブラハムの目の前に広がっているのは、ロトの選んだ土地と比較するのも虚しいほどの荒れ野です。しかし神は、アブラハムに荒涼とした大地の砂粒を見せて、こう言われます。「**あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。...さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから**」(16~17 節)と。「**砂粒**」(アファル)という言葉は、「塵」や「土くれ」といった意味合いを持ち、聖書の初めに記された人の創造物語を思い起こさせます。「**主なる神は、土(アダマ)の塵(アファル)で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた**」(創 2:7)。「**塵にすぎない**」(創 3:19)ものに、神は命の息吹を吹き込まれます。不毛に見える場所に、泉を湧き上がらせませす。神の祝福された場所にこそ、泉が湧き出ます。神は、土の塵で最初の人アダムを造られたように、取るに足らないものを祝福し、永遠の命を吹き入れられるのです。

わたしたちの間から兄弟姉妹が一人、また一人と取り去られました。しかし、この別れが一筋の道をたしかに指し示しています。荒れ野を行かねばなりません、この道は不毛な地へ続いているのではなく、断絶でもなく、わたしたちの本当の故郷へと続いているのです。別れは終わりではなく、新しい命の始まりです。神は言われます。「**さあ、目を上げて、あなたがいる場所から...見渡しなさい**」。うつむいていないで、天を仰ぎなさい、と。